

はじめての実習に対する不安感に関する考察

A consideration on anxiety about first practice

環太平洋大学短期大学部人間発達学科

黒澤 寿美

KUROSAWA, Sumi

IPU Women's College

Department of Human Development

キーワード：実習不安，教師像，事前指導

要旨：本研究では、「実習不安」を抱えた学生の実習後の感想を質的研究法を用いて分析することにより，学生が実習不安を乗り越えていく様相を明らかにすることを目的とした。

保育士養成課程1年次の学生42名の初めての幼稚園実習後のレポートの内容をGTAを参考にして質的分析をおこなった。その結果，実習において，学生は【実習内容の見通し】をもつことにより安心して実習に臨むことができ，【子どもとのかかわりから感じた自身の教師像】や【現場教員との関わりから得られた教師像】をイメージすることにより，【自身の保育技術に対するメタ認知】を働かせて前向きに実習不安を乗り越えていく様相が示された。

このことから，学生への事前指導において，以下の3点が重要であることが示唆された。

- ①事前に園の一日の流れを把握することが出来るようなプレ実習の試み
- ②各自の保育技術の定着状況を学生自身がフィードバックできるような評価方法の確立
- ③子どもや現場教員と関わる中で形成された教師像を自覚できるような実習記録の開発

I. 問題の所在と本研究の目的

1. 問題の所在

保育士・幼稚園教諭を目指す学生にとって，実習は乗り越えなければならない重要な学習内容である。しかし，実際には学生達にとって実習は容易ではなく，途中でドロップアウトしたり，実習後に自信を喪失してしまったりする学生も多いのが現状である。

その一つの要因として「実習不安」がある。「実習不安」については，いままでに様々な研究がなされ，実習前に不安を抱いていても実習中に不安が弱まる傾向があること（清水ら，2011）や，実習終了後には，ほとんどの学生の「実習不安」が解消されること（大野木ら，1996）が示唆されている。

しかし，事前指導の中で，保育技術の丁寧な指導や円滑な人間関係構築のためのコミュニケーションスキルトレーニング等の工夫が各養成校でなされているにも関わらず，「実習不安」により実習をドロップアウトする学生は後を絶たない。

その要因として，これまでの研究は，実習前後に行

うアンケート調査による量的研究が多かったことがあげられる。このような量的研究により，「実習不安」の要素を特定することはできたが，実際に実習生がどのような悩みをどのように乗り越えた（または乗り越えられなかった）のか，その様相を捉えるためには質的研究手法による分析が求められると考える。

2. 本研究の目的

上記のような実習生の現状を踏まえて，本研究では，「実習不安」を抱えた学生の実習後の感想を質的研究法を用いて分析することにより，学生が実習不安を乗り越えていく様相を明らかにすることを目的とする。

II. 対象及び方法

1. 対象

A女子短期大学に在籍し，保育士・幼稚園教諭を目指す1年生42名を対象とした。

2. データ

実習前のアンケートで、実習に対して特に強い不安を示していた学生33名を抽出し、実習後に自由記述した「実習の振り返り」のレポートをデータとして用いた。

3. 分析方法

本研究では、観察データから被験者の体験構造や意識構造、および意識構造への関与とその変容の分析で実績のあるB.G. GlaserとA.L. Straussの質的帰納的記述研究手法であるGrounded Theory Approach (GTA) を採用する。GTAは特定対象領域のデータに密着して (grounded on data) 理論を生成する方法 (approach) であり、このような領域密着理論は「患者のケア、人種関係、教育、非行」といった「特定領域あるいは経験的な領域のために展開」される理論である。GTAは「社会的相互作用に関係し人間行動の予測と説明にかかわり」「データに密着した分析から」理論を生成する。

GTAは質的研究法の中でも厳密な研究課題の設定とデータの収集方法、そして、データ間の意味関連から概念生成の手順、概念観の理論的関連、生成された理論仮説の妥当性をめぐる論議など、研究方法について第三者による追試が可能であり、方法における客観性が高い。

4. 分析手順

分析は学生の実習不安を乗り越える様相の特徴を捉えるため、GTAによる分析手順(表1)を参考に、学生の記述から実習不安を乗り越えた様相に関する概念を抽出する質的分析方法を用いた。

まず、各学生のレポートを切片化しローデータを作成した。ローデータを共通する特性ごとにまとめ、概念 (< > で表す) を生成した。続いて、複数の概念に共通する意味内容をまとめてカテゴリー(【 】 で表す) を生成した。なお、今回は紙面の都合上、生成された各カテゴリーの説明までを示す。

表1 GTAの分析手順

①研究課題の明確化
②研究テーマの選定
③データの収集
④データの切片化
⑤特性の識別
⑥概念の生成

⑦カテゴリーの生成
⑧カテゴリーの説明と定義
⑨カテゴリー構成図の作成
⑩コアカテゴリーの生成
⑪ストーリーラインの生成
⑫理論仮説(グランデッド・セオリー)の生成
⑬理論仮説の妥当性の検証

5. 倫理的配慮

本研究は、「教育実習事前事後指導」の授業時に、学生に研究計画を説明し同意を得た。また、本研究で用いた学生のレポートは個人が特定されないよう配慮した。

Ⅲ. 結果と考察

保育学生が実習不安を乗り越える様相に関する記述は、33名のレポートに見られた。それを意味内容によって分類した結果、表2に示すように、21概念、10サブカテゴリー、4カテゴリーが生成された。4つのカテゴリーは【子どもとの関わりから感じた自身の教師像】【現場教員との関わりから得られた教師像】【実習内容の見通し】【自身の保育技術に対するメタ認知】である。これらのカテゴリーから、実習において、学生は【実習内容の見通し】をもつことにより安心して実習に臨むことができ、【子どもとの関わりから感じた自身の教師像】や【現場教員との関わりから得られた教師像】をイメージすることにより、【自身の保育技術に対するメタ認知】を働かせて前向きに実習不安を乗り越えていく様相が示された。以下に、これらのカテゴリーの内容について考察する。なお、記述内において、概念は<>、サブカテゴリーは[]、ローデータは斜字で示す。

1. 【子どもとの関わりから感じた自身の教師像】

学生は、不安や緊張を抱えながら実習に入り、子ども達と対峙することになる。その時、<子どもからの積極的な働きかけ>があったり、<子どもの元気と笑顔>にふれたりすることで、緊張が緩和される。「子どもと一緒に遊んでみたら、子どもと打ち解けることができてすごく安心した」といった学生の記述に見られるように、<子どもとのふれあい>が学生の不安を軽減させていることがわかる。このような、[子どもとの良好な関わり]によって、<保育者になりたい思いを再確認>することができ、実際に2年後<自分

表2 保育学生が実習不安を乗り越える様相に関するカテゴリー一覧表

カテゴリ4	サブカテゴリ10	概念21	ローデータ
子どもとの関わりから感じた自身の教師像	子どもとの良好な関わり	子どもからの積極的な働きかけ	はじめは何をしづらいかわからないかのように接すればよいかかわらなくて戸惑った。子どもが楽しそうに「話しかけてくれる姿を見て自分も楽しい気持ちになった。子どもには元気よく接しようと思っ掛けた。
		子どもとのふれあい	緊張してわからないこともたくさんあって不安だった。始めは園児とどう接していいかわからず園児が遊んでいる様子を見るだけだったが、子どもと一緒に遊んでみたら、子どもと打ち解けることができずこく安心した。
		子どもとの元気と笑顔	はじめの実習で不安でいっぱいだった。それでも、次の日子ども達が笑顔でおはようと言ってくると元気になりまし毎日夜遅くまでかかっていたが、次の日子ども達の笑顔を見ていると疲れが取れた。保育の仕事に就くことには何回か迷いもありましたが、今回の実習で気持ち面でもよいことを学びました。私は保育の仕事に就きたいと思っていてそれが正解だったんだと自信につながった。
	将来の教師像のイメージ化	保育者になりたい思いを再確認	現場に触れることで将来を少しはイメージできた気がする。自分が働いているイメージができた。
		自分の働いている姿をイメージ	毎日どう園児に関わりたいかわからずどうしようと思っていました。こんなとき先生はこんな声かけていたなと自分で考えながら対応した。自分の声かけで園児が頑張ろうと思ってくれたことがとてもわかしに誇りを感じました。
	子どもとの意思疎通の実体験	自分の声かけで園児が動いてくれたこと	自分が子どもの間に入り、言葉にして会話を成立させようとしたがなかなかうまくいかなかった。はじめなかなか話しかけてくれなかった子ども達が話しかけてくれた時嬉しかった。
子どもとのコミュニケーション		園児との関わり方や話すことがとても不安でどのようにしていけないのか全く分かりませんでした。丁寧にやさしくアドバイスされて少し不安がなくなりました。	
現場の先生方の観察		運動会の繰り返し練習で多くの園児は疲れが見られたが、それでもあきらめずに最後まで熱心に指導している姿を見て応援している私達も心に響くものがあった。	
現場教員との関わりから得られた教師像	現場の先生からの学び	指導教官の優しいアドバイス	給食の時食べない子への対応がお腹がいっぱいなのか、味が苦手なのかわからなかったが、先生の「半分だけ頑張ってみよう」という声掛けに感心した。
		先生の指導法の素晴らしさ	先生達が必死で子ども達を援助している姿が見れた。先生達の姿を見て子どもにどのように接したらいいかわかりました。
		先生達の必死な姿	始めの方は何をすべきなのかわからないのかかわらず動けなかった。先生に指導されて自分から動かなければならないことがわかった。声をかける方法でも言葉や話し方によって子どもが理解しているのが大きく変わることがわかった。
	先生からの指導	先生からの指導	子どもにどう声かけをしたらいいかわからなかった。何をしてもいいかわからず担任にきいてばかりだった。
		教えてもらえる安心感	毎日子どもと遊ぶために幼稚園に行っているんじゃない。幼稚園教諭として自覚をもって行っている自分に言い聞かせた。
		先生としての自覚	「先生」と呼ばれることの責任感の大きさを感じた。
実習内容の見直し	時間経過による慣れ	不安がいっぱいで子どもの前でどうすればいいか混乱してしまうことがあった。でも子ども達と一緒にいる時間が長くなるとだんだん慣れてきて最後には子ども達ともっと関わりたいと思うようになった。	
	体力の持続	実習中は風邪をひかないように健康管理をがんばったが、実習が終わった途端風邪を引いてしまった。	
	既知知識と現状とのつながり	子どもに注意すべきことは注意することが出来なかった。どんなふうに話かけたらいいのかわからないのか、どんなことを手伝わたらいいのかわからないのか教科書を参考にやっていたけど教科書通りには行きませんでした。教科書で学んだ発達段階よりはるかに自立して一人でできることが多かった。	
自身の保育技術に対するメタ認知	自分の成長や欠点の気づき	自分の成長を実感	始めは何をしづらいかわからない、園児とどう接したらいいかわからず不安だった。人間としても実習生としても少しは成長できたんじゃないかなと思う。頑張ったよかったと思った実習でした。
		はじめての経験の達成感	これまで小さい子と触れ合っことがないので頭が真っ白だった。最後までやり遂げられるから心配だった。おむつ替えを経験したことがなかったのでもも勉強になった。掃除や洗濯も今まであまりやっなかったのでも経験をした。
		自分の欠点に気づき次回への課題を発見	日誌を書きながらもっとこうすればよかったなあと反省してました。先生という立場で子どもに接する難しさや自分に足りないものをいろいろ考えさせられました。手のかからない子が良い子という自分の価値観に気づかされました。最終日にもらったメダルは本当にうれしく私の決意を改めて強くしてくれました。

の働いている姿をイメージ>することができるのである。

また、<子どもとのコミュニケーション>がうまく図れることにより、<自分の声かけで園児が動いてくれたこと>が自信につながり、実習への前向きな姿勢が見られるようになった。

2. 【現場教員との関わりから得られた教師像】

「始めの方は何をすべきなのか何をしたらいいのかわからず動けなかった。先生に指導されて自分から動かなければならないことがわかった。」という学生の記述に見られるように、<先生からの指導>が学生の実習への取り組み方のきっかけになっている。学生達は<現場の先生方の観察>を通して、<先生達の必死な姿>や<先生の指導法の素晴らしさ>にふれることができる。さらに、<指導教官の優しいアドバイス>

により、何をしていたらいいかわからない漠然とした不安が解消されている。このような「現場の先生からの学び」は、先生への憧れを育み、<幼稚園の先生としての自覚>や<先生と呼ばれることの責任感>が芽生える。

但し、これらの学びは「教えてもらえる安心感」が基盤となっており、<指導教官へ聞くことが出来る雰囲気>が実習園にあることが必要である。

3. 【実習内容の見直し】

学生の不安の大半は、何をしたらいいかわからない、どうしたらいいかわからないといった、初めての経験に対する恐れや不安である。「不安がいっぱいで子どもの前でどうすればいいか混乱してしまうことがあった。でも子ども達と一緒にいる時間が長くなるとだんだん慣れてきて最後には子ども達ともっと関わっ

ていたいと思うようになった。」という学生の記述に見られるように、<子どもと接する時間の長さによる慣れ>により、一日の幼稚園の流れがわかり、次に何をしたらよいのか見通しがもてるようになることが安心感につながる事がわかる。また、<健康管理への心配り>をすることで、[体力の持続]ができ、10日間の実習をやり通せる見通しがもてたことも安心感につながる要因となっている。実習内容については、<教科書や授業との比較>を行うことで、眼前の子どもの様子が授業の中で習ったことと結びつき、[既有知識と現状とのつながり]ができる。以上のように、一日の流れがわかり、実習期間全体の見通しがたち、実習内容について既有知識とのつながりができることが、学生の不安を取り除いているといえる。

4. 【自身の保育技術に対するメタ認知】

実習は、学生達にとって初めて経験することの連続である。「これまで小さい子と触れ合ったことがないので頭が真っ白だった。最後までやり遂げられるか心配だった。おむつ替えを経験したことがなかったのでとても勉強になった。掃除や洗濯も今まであまりやってなかったのでいい経験をした。」という学生の記述からもわかる通り、特に現在の学生達は日常生活の中での経験が不足している者も多い。このような学生が実習の中で「はじめての経験の達成感」を味わうことは、実習に対する不安を取り除く大きなきっかけになると考えられる。さらに、「始めは何をしたらよいか、園児とどう接したらいいか全くわからず不安だった。人間としても実習生としても少しは成長できたんじゃないかなと思う。頑張ってたよかったと思えた実習でした。」という記述に見られるように、<自分の成長>を感じることで、自己肯定感が高まることも期待できる。今回の実習で自分が出来なかった保育技術（例えば、ピアノや手遊び、日誌など）が明らかになった学生は、<自分の欠点に気づき次回への課題を発見>することにより、2年次の実習には前向きに取り組むことができると考えられる。

IV. 実習事前指導への示唆

本研究では、保育学生が実習不安を乗り越える様相を明らかにした。すなわち学生は、【実習内容の見通し】をもち、【自身の保育技術に対するメタ認知】を働かせることにより、【子どもとの関わりから感じた自身の教師像】や【現場教員との関わりから得られた

教師像】を形成することが実習不安を乗り越える様相として明らかとなった。

このことから、まず第1に、学生への事前指導において、実習に入った際の自分の動き方について見通しをもたせる必要がある。事前指導の重要性については、既に指摘されており、佐野ら（2011）は、実習記録や制作技術・コミュニケーションスキルを、実習前にトレーニングすることが身体的、精神的に疲労することなく実習するために有効であるとしている。本研究では、保育技術や社会性を高めるスキルをトレーニングするというマクロ的視点を踏まえつつ、【実習内容の見通し】という具体的視点が浮かび上がった。

保育学生の多くは、高校までに職場体験などで保育園を訪れている人も多い。しかし、職場体験では、子どもと関わることに主眼がおかれ、先生の動きをじっくりみることではできなかったであろう。そこに、今まで子どもと関わった体験と実習とのギャップがあると考えられる。このギャップを埋めるために、例えば近隣の協力園へ行き、先生の動きを見学観察する機会を設けることが考えられる。4～5人のグループで午前中は協力園での観察、午後は観察したことをもとにグループディスカッションやクラス全体での情報共有を図る時間とし、先生の動きに焦点を絞った事前指導を行うのである。保育者の視点で見学観察をすることで、実際に実習に入ったときの自分の動き方をイメージすることができ、安心につながると考えられる。

第2に、今まで学んだ保育技術が、どの程度身についているか学生自身で確認させる必要がある。「できると思っていたことがうまくいかず、できていないことばかりで悩んだ。」や「実習してみてもまだまだできていないことが多かった。」の記述に見られるように、事前準備の不十分さに気づかず、実習に入ってから自分のできていない面に直面し心折れてしまう学生達がいる一方で、「正直不安と恐怖でいっぱいだった。しかし、思ったより子ども達と関わることで安心して安心した。」や「お姉さん先生の絵うまいねと子どもに言われて、心の底から自信が湧きあがってきた」のように、自分を過小評価し、自ら不安に陥っていたことに気づいた学生もいる。各自の保育技術の定着状況を学生自身がフィードバックできるような評価方法の確立が求められていると言えよう。

第3に、子どもや現場教員と関わる中で形成された教師像を自覚する必要がある。「毎日子どもと遊ぶために幼稚園に行っているんじゃない。幼稚園教諭として自覚をもって行っていると自分に言い聞かせた。」

という学生の記述からも、学生が保育者としての自分をイメージして実習に臨んでいることが読み取れる。先生としての自覚をもつことで、学生達は、自分の内面にある「教師像」に気づく。そして、保育現場における保育者の情熱ややりがいを感じ取ることで、自身の中の「教師像」はより鮮明になっていくのである。そこで、形成された「教師像」を学生自身が自覚できるような実習記録を開発することで、実習中に感じた自身の「教師像」を振りかえることが実習不安を乗り越える一助となると考えられる。

V. 今後の課題

本研究では、初めての实習における実習不安を乗り越える様相に着目した。今後は、引き続き2年次の実習における追跡調査を進めていくとともに、学生が自身の保育技術の定着度を確認できる評価方法や、実習中の自分の教師像の変容を記録できる実習記録形式を探っていきたい。

引用文献及び参考文献

- 大野木裕明・宮川充司(1996),「教育実習不安の構造と変化」,『教育心理学研究』,第44巻,第4号, pp.87-95.
- B.G. Glaser&A.L.Strauss(1967)“The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research”, Aldine Publishing Company, Chicago, 1967.
- 後藤隆・大出春江・水野節夫訳(2008),『データ対話型理論の発見』,新曜社(初版第12刷), p.12.
- 佐野友恵・廣橋容子(2011),「はじめての実習に対する不安感と実際(1)」,国際研究論叢, 24(2), pp.157-170.
- 清水秀夫・大濱孝子・熊谷崇久・植木文貴・吉井健人(2011),「教育実習生がもつ本実習の不安に関する考察」,群馬大学教育実践研究,第28号, pp.301-308.
- 入江和夫・福地昭輝・入江三津子(2014),「学生の保育実習不安と自立感」,山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,第38号, pp.21-28.
- 前田有秀(2017),「保育専攻生における保育実習経験の効果に関する研究-保育者効力感変化に影響を与える事前要員の検討-」,尚絅学院大学紀要,第73号, pp.15-27.